

# 女達の影、女という影

——アドルノのセクシャリティを覗く（1）<sup>1</sup>

入 谷 秀 一

## ▶キーワード

アドルノ、性愛、覗き見、  
想像行為

## ▼要 旨

コミュニケーション的理性や討議倫理など、アドルノ以降のフランクフルト学派（主にハーバーマス）が人間の非身体的次元に議論のフィールドを移したのとは違い、現代のフェミニスト達がこの学派から引き継ごうとしているのは、アドルノの性愛論に代表される唯物論的遺産（身体の有限性や傷つきやすさへの共感、非同一性の教説など）である。ただし、彼女らはアドルノに、西洋の知を長らく支配してきた合理性一辺倒の男性原理を解体せんとする意志のみならず、時代にそぐわない性的抑圧の名残をも見いだしてきた。彼の同性愛嫌悪はその典型であろう。こうした両義性をきちんと整理しないうちは、性愛に関するアドルノの「遺産目録」は不明瞭なままに留まる。が、その明瞭化のためには、そもそも彼のバイオ・グラフィー（生の記録）に占める性愛のポジションを明らかにするという、ともすればプライバシーの覗き見に終始しまいがちな考察を徹底して行う必要がある。本稿はその一つの試みだが、著者が明らかにしたのは、性愛がマス・メディアや文化政策を通して社会化されていく動きに対する、彼の微妙なスタンスであった。本稿では特に、ポルノグラフィーに対するアドルノの割り切れない態度（一例に過ぎないが、彼は大衆化した性産業を批判する一方で、ポルノ雑誌の規制化に対しはっきり反対の立場を表明していた）を、覗き見という概念を手がかりとして浮き彫りにした。

## 1、2つのラブ・アフェアー、2通りの直接性、そしてアドルノの死

1969年4月22日、SDS（社会主義ドイツ学生連盟）の活動家達によってテオドール・W・ア

ドルノの講義は妨害され、千人以上の聴衆であふれた講義室は不穏な雰囲気包まれた。その最中、3人の女学生が彼を取り囲む。そして花びらを振りまきながら、胸をむき出しにし、扇情的なパントマイムの身振りでキスを迫った。不安と絶望の表情を浮かべたアドルノは「さらに続く狼藉に対して、自分の書類鞆を楯にして抵抗し、かろうじて帽子とマントをつかんで、急遽、講堂をあとにした。」<sup>2</sup> この約3か月後、彼は休暇先のスイスで心筋梗塞に襲われ、65歳の生涯を閉じる。

アドルノの死は、その時期が血なまぐさい学生運動の最高潮とも重なったために、現代思想史を飾る一つの象徴的出来事と捉えられてきた。そこには、確かに問うに値する多くの「何」「なぜ」が存在する。戦後ドイツにとって60年代とは何であったのか。いわゆる68年運動と呼ばれる学生闘争とは何であったのか。そして両者に対して、アドルノを含むフランクフルト学派の知識人達が担うことになった歴史的意味とは何であったのか。なぜアドルノは学生達の矢面に立たされることになったのか。なぜアドルノは急死しなければならなかったのか、等々——。だが、以下で注目したいのは、こうした真面目な事柄<sup>ザッヘ</sup>に比すれば、些末で個人的、表立った議論にふさわしからぬ事柄<sup>アフエアー</sup>である。要するに女、しかも「かの騒然とした時代にアドルノの生活を悩ましいものにした」<sup>3</sup> 女達の影である。或いは女という影、ラブ・アフエアーにまみれたアドルノにつきまとう性的志向（セクシャリティ）と言ってもよい。それは思想と無関係の、単なる実生活上の趣味や好みに過ぎないのだろうか。断じて否！ 彼は事あるごとに、快楽の存在なくして思想や理論は成立しない、と公言していたのではないか<sup>4</sup>。そして20世紀の前半においてファシズムという白昼夢に結集することになった西洋的・合理主義的思考のそもそもの起源——合理主義自身が目をそらし、忘却するよう繰り返し自己に命じたところの、はじまりの光景——に彼が据えていたのは、かの女神セイレーンの誘惑ではなかったか<sup>5</sup>。

女神の誘惑は、夢うつつに幸福を約束するが、それは容易に悪夢へと反転する。1969年5月5日のシュビーゲル紙との対談の中で、アドルノは、彼にしては珍しく心中穏やかならざる様子で、2週間前に遭遇した「乳房テロ（Busenattentat）」に言及している。「あらゆる類のエロスの抑圧や性的タブーに対して常に反駁してきた、まさに私のところで！ 私を嘲弄してヒッピーの身なりをした3人の娘たちを私のところにけしかけるとは！ 私はこうしたことには我慢ならないと思いました。こうしたことで得られた笑いの効果とは、要するに、裸の胸の娘を見ればヒッと忍び笑いをするような俗物の反応に他なりません。もちろん、こうしたばかげたことが計算されていたのです。」<sup>6</sup> 古代の英雄オデュッセウスは、周到な計画と計算をめぐらし、女神セイレーンからその魅惑的な歌声のみを首尾よくかすめ取ったが、現代の女神たちは、相手（男）から忍び笑いを引き出すという目的のためだけに、自らの肉体を奉仕させる打算家と化した、とアドルノには映ったことだろう。この乳房テロが物語るのは、単にテロの担い手たちにとって、アドルノ——伝統的なドイツの講壇哲学や学問制度、或いはファシズムの権威に対し、文字通り命がけで対峙したユダヤ系知識人の代表的存在——自身が象牙の塔に安住する権威と映った、ということだけではない。これは別稿で詳しく論じるしかないが、女は、男の想像するものに過剰なまでに同一化し、男を安心させ、男の想像する「女らしさ」のいわば陰画として「男らしさ」を映し返す。かくして女は、男らしさの発動としての「自然支配」へと男をけしかけ、ついに彼ら自身を自壊せしめる。以上のような復讐の恐るべき機能こそ、アドルノが男に影のように寄り添う「女性的なもの」に予感していた当のものではなかつ

ただろうか。であれば、人生の終盤において、彼は、彼言うところの女神メガイラの末裔たちに魅入られた<sup>7</sup>、ということになろう。たとえエロスを絶えず擁護してきたアドルノに対し、これこそあなたの擁護してきたもののはずよね、と公然たる同意を迫ろうとも、そうした直接的な訴えこそが、彼にとっては、大いなる誤解と映ったはずだ。それとも、誤解を承知で男（或いはアドルノという権威ある「父」）を屈服させようとする娘たちを前に、彼は、もはや抗弁する余地なし、と判断するしかなかったのだろうか。

シュビーゲル紙との対談でアドルノは繰り返し、実践に対する理論の優先を強調している。「哲学は、いかなる直接的な措置や変化をも自ら推奨することはできません。変化を起こせるとすれば、まさに哲学が理論に留まる場合です。」(GS20. I, S. 408.) 生に対して無媒介的な仕方に変化を促すこと、生に直接触れること、こうした実践をアドルノは極度に警戒する。だがそれは、身体にまつわる問題——生の身体性に関連づけられる、感情、欲求、衝動、反応、行為など——を副次的なものとみなす、お決まりの知性的な、要するに「男性的な」態度を意味していたのだろうか。いずれにせよ、彼は直接性から撤退を迫られた——だが完全に、ではない。

アドルノの生活を悩ましいものにした女の影が、この時期、別に存在する。彼のポリアモリー（複数愛傾向）は周知の事実である。アルレッテ・ピールマン、自分より30歳ほど若く、すでに子供もいたミュンヘン出身のこのシングルマザー、女優とモデルと画家を兼任するボヘミアンと、アドルノは数年来、愛人関係にあった。衝突、別れ、別の男との結婚、その破綻、再度の関係修復を経て、最終的に彼女はアドルノの元を去る<sup>8</sup>。悲嘆にくれた彼はその心情を、長年親しくしていたウイーンの女優——またしてもミューズだ——ロッテ・トービッシュに吐露している。「まるで私の直接的な生が終わりを迎えたようです」<sup>9</sup>とアドルノが手紙に書き綴ったのは、1969年の4月17日、かの乳房テロにみまわれる、わずか5日前のことである。

女学生のむき出しの体の接近は恐怖の対象でしかないが、恋人との関係の破綻を嘆く場合では、生の直接性はむしろ哀惜の対象となる。無論、両者はせいぜい、関係の担い手が女である、程度の共通点しかないだろう。乳房テロの直接性は、その肉体的接触の「外側」に目的を据えている。つまりそれは、敵対勢力の屈服を周囲に誇示するための政治的行為である。これに対して、恋人との別れにより危機にみまわれている生の直接性は、あくまでアドルノのプライバシーに、しかも、打算を働かせる知的操作以前の生の「内側」に存する。要するに、乳房テロには、何か不純で不自然な、エロスに似つかわしくない含みがある——。こう整理してみると、何かあまりに凡庸な真理が眼前に置かれて考察終わり、という印象を抱かざるをえない。ああ、アドルノはエロスをあくまで、自然で個人的な秘め事、社会の冷厳たる現実からの避難所として大事にしていたのだね。ところで、そこにどういう思想の可能性があるのだ、と。

いうまでもないが、筆者はエロスに関するアドルノの主張を全面的に肯定する気は全くない。そこには確かに、前時代的なブルジョワ意識、分析の実証的不備、脆弱な理論的枠組み、セクシャリティに関する拭い難い偏見など、問題が山積している。ただし、エロスをプライベートな領域に押し込む姿勢はアドルノの立場ではない、ということは強調すべきだろう。そもそも、内面性（Innerlichkeit）の容赦ない解体者を自認する彼は<sup>10</sup>、実生活においてすら、彼なりの仕方によって自己のプライバシーを他者にさらけ出し——その最大の「共犯者」は、あろうことか彼のポリアモリーの寛大なる観察者であった妻グレーテルである！<sup>11</sup>——これを「止揚す

る」努力を徹底して行ってきたのであるから。

キルケゴールやハイデガーのような実存哲学を特徴づける（と彼が捉える）内面性という概念に対し、アドルノはほとんど生理的嫌悪ともいえるべき徹底した批判的姿勢を崩さないが、そこには、実存哲学に欠如している社会学的な診断が働いている、とひとまずは言えるだろう（これは次節で述べる）。だが、内なるものの代表ともいえるべき「盲目の肉体的な快楽」——アドルノはこれを、ユートピアの測定を可能にする真理の契機とまで断言する（Vgl., GS4, S. 68.）——を肯定するにとどまらず、この盲目から脱し、性愛に「目」を与え、肉体的な経験を「外から」見定めようとする動機、要するに、盲目と可視化とのほごまに快楽を位置づけようとするアドルノの不透明（＝不純）な動機とは何であろうか。以下に続く論述では、彼と他のフランクフルト学派の知識人達（特にW・ベンヤミンとH・マルクーゼ）との議論を瞥見することで、表象としてのエロスが問題となる文脈を浮かび上がらせる。私見では、可視化の契機を必然的に含みながらも、これに抵抗するエロスの経験がアドルノに提供しえたのは、覗き見というまなざしの可能性以外にない。結果として彼は、これに極めて両義的な態度を表明せざるを得なくなった。彼が辿るこうした隘路をどう評価しうるか、ということは別稿で論じよう。本稿としては、覗き見に仮託したアドルノの欲望を覗くところまで論述を進めることを、ひとまずの目標に置く。

## 2、物象化と自然化の共犯——室内で羽ばたく想像力

まず、アドルノが外と内、思想と実生活とを峻別するスタイルを、断固拒否していたことを確認したい。「仕事と娯楽の二者択一を認めないことほど、知識人にふさわしいであろう生き方とブルジョア市民のそれとの間の明確な一線の特徴づけるものはない。」（GS4, S. 147.）さらに彼が、余暇や遊び、娯楽といった個人的領域が与えられるにせよ、それらを「外部」の干渉無しで存立する、何か自然で汚れなき親密圏として扱うことを、これまた断固拒否していたことを確認しよう。家族それぞれが個室を持つというプライベートな空間の成立、この市民社会の文化史を飾る一コマは、そうした空間自体が徹底して物象化される産業社会の歴史的動向と連動している。こういう洞察をアドルノは、1930年代はじめに書いた教授資格請求論文『キルケゴール 美的なものの構築』以来、手放したことがない。

彼の言い方では、実存哲学者キルケゴールは内面性の住人である。いくつかの著作の中でキルケゴールは、室内でゆったりくつろぎながら、まるで外の世界を歩いているかのようにあれこれと想像をめぐらす自分の姿を伝えている。以下、『誘惑者の日記』の一節を、やや長めに引用したい。この一節をアドルノはキルケゴールの作品全体の鍵と捉え、上に挙げた論文の中で引用しているが、彼の畏友ベンヤミンはこのアドルノの引用をそのまま、断片草稿として残されたパサージュ論に転載している。それに何といても、『誘惑者の日記』の執筆者ヨハネス（＝キルケゴール）の想像の中心軸に居座っているのは、またも女性なのであるから。

「私はどんなに年をとっても、あの小さな部屋にいる以外のコーデリアを思い浮かべることは決してできないだろう。……居間は小さく、大変居心地がよく、ほんとうは小部屋カビネットと言った方がいいくらいだ。私は、しばしば彼女と並んで座るソファからこの部屋を眺め

るのが一番気に入っている。ソファの前には丸いティーテーブルがあって、その上に綺麗なテーブルクロスがかかっている。幾重もの襷を見せている。テーブルの上にはぐいと力強く伸びた、花のかたちをしたランプが置いてある。その花冠の上には、手のこんだ紙製の傘がかかっている、あまりに軽くてそれはいつも揺れていた。このランプは、その奇妙な形のゆえに私にオリエントを思い起こさせ、またその傘が絶えずゆれる様は、その地に吹く穏やかな風を思わせた。床には、きわめて特別な種類の革で編まれた絨毯が敷いてあり、それがランプと同様に異国的な印象を放っていた。こうしてこの絨毯に座ると、私は幻想の中で彼女と一緒に、この不思議な花のもとにある大地に座っていたり、あるいは、船長室に陣取って、大海原をはるか沖に向かって帆走したりするのである。……コーデリアには……いかなる前景も似つかわしくない。ただ水平線が持つ無限の大胆さだけが似つかわしい。」<sup>12</sup>

ヨハネスのまなざしは婚約者コーデリアのそれと一体化し、水平線の彼方へと無限の拡がりを見せる。回想の地平は、大地や海原を映し出す、額縁のない風景画と化す、とでも言えようか。けれども、そうしたイマジネーションの触媒として不可欠なのは、アドルノに従えば、室内に飾られた東洋趣味のインテリア、つまりブルジョワ向けの商品である。

かくの如く、余暇の過ごし方が商品の消費という形態をとる限り、余暇は個人閉塞化していくように見えて、その実、ますます規格化した同一年行動を、個々人に促すことになる。別の側面からいうなら、生活の隅々まで大量生産の既製品が浸透するにつれ、そうした品には、自らの出自を覆い隠すような特徴が際立ってくる。19世紀の日用品として教養市民層の間で流行した絵葉書には、これまた東洋のモチーフが度々登場したが、そこに描かれているのは、歴史的・社会的文脈が切断され、一幅の風景と化したオリエントのユートピアのイメージである。文化は人間的営為の複雑で、時に血なまぐさい関係性——例えば当時、列強諸国がおし進めていたアジア・アフリカの植民地化および文化的収奪という帝国主義的現実——を脱・歴史化し、物品は第二の自然と化す。キッチンな物品が愛玩すべき自然を提供する、というのが室内で展開される寸劇なのだ。市民が享受するのは、感傷と官能で満ちた牧歌的風景であり、その典型の一つをアドルノは、西洋の内側にも見いだした。市民社会におけるシューベルト受容がそれである。ロマンチストで、女店員に翻弄される世間知らずの天才というシューベルト・イメージにより、大衆は彼を瞬時に理解し共感を寄せる——才能あふれる音楽家だろうけど、結局は私たちと同じ人間なんだわ、といった具合に。アドルノによれば、芸術家の人格や人間像を主題にした伝記が、芸術家と受容者との、このあまりに近い心理的距離の形成に寄与した。深い音楽的教養を必要とする作品解釈に必ずしもこだわらないそうした書籍の浸透とともに、シューベルトは、いわば動物園の珍しい動物たちのように、甘美で人畜無害な自然風景として、市民生活の日常の一要素に据えられる<sup>13</sup>。かくして文化が文化自身を偽ることになる。アドルノやベンヤミンの表現を借りるなら、外的自然が内的装飾＝インテリアへと加工されるのである。絵葉書、挿絵入りの本、そしてもちろんベンヤミンの場合、写真が分析の主たるモチーフとなるが、彼は幼少期のカフカを映した一枚の写真に、幾度か注意を促している。その写真はある写真スタジオで撮られたもので、エキゾチックな棕櫚の木、タペストリーやイーゼルなどが所狭しと詰め込まれた部屋の中で、山ほど縁飾りのついた服を着せられ、スペイン人がかぶ

るような大きな帽子を持たされた6歳の少年カフカが、身じろぎもせず立っている。人為的に演出された世界の中心で、ただ少年の悲しみに満ちたまなざしだけが、彼を取り巻く虚構を告発しているかのようである。「果てしない悲しみに浸されたこの画像は、初期の写真とのひとつの対極をなしている。初期の写真に写っている人間たちは、まだこの少年ほど孤立無援のうちに世界を見つめてはいなかった。彼らのまわりにはアウラがあった。」<sup>14</sup>

### 3、健康的な、あまりに健康的な——理性の抽象性と肉体の直接性との共犯

前節で取り上げた物象化と自然化との共犯は、アドルノに従えば、まさに性に関する言説や文化的イメージを構成する。そこでは室内での——要するにベッドの中での——陸事がマス・メディアを通じて可視化されると同時に、返す刀で、大衆化したサイコ・セラピーによって「正常な」性生活のストーリーが規範化される。

とはいえ、現代人の性生活を描写する彼の筆致は、それほど複雑ではない。例えば戦後に書かれた彼の代表作『ミニマ・モラリア』の次の一節を見てほしい。「英語のきまり文句に言う『リラックスして、気持ちを楽しんで』relax, take it easy 事を行うのが教養俗物達の理想だが、元来この文句は病院の看護婦たちの口癖だったわけで、法悦境をあらわすのにふさわしい言葉ではない。幸福は不経済であるために時代おくれになった。なぜなら幸福のイデーである両性の交合はリラックスした状態の反対であり、無理強いされた労働が呪わしい緊張状態であるとすれば、至福の緊張状態だからである。」(GS4, S. 248.)

アドルノの主張は要するにこうだ。生産性を至上の行動原理と捉える現代人は「澁刺たる元氣とはちきれんばかりの精力を証明することに憂身をやつしている」(GS4, S. 66.) が、そんな彼らにとって性生活とは、いわば日常事の労働の延長線上に置かれた余暇生活、すなわち大衆映画を見るとか、その映画俳優の服装や容貌、装飾品や車の趣味などを模倣し、その時々々の流行物を旺盛に消費することと大差ない。いわば型通りの通常業務と化した夜の営みは、性愛というより、心身の健康やその生産性を確認し実践するための生理的行動に近くなる。その一翼を担うのは、いわゆる修正フロイト主義者と呼ばれるセラピスト達で、彼(女)らにとって重要であるのは、患者らの抱える性的葛藤に丹念に寄り添うことではなく、少しでも早く患者らのリビドーを、社会に適用するパーソナリティーへと昇華(脱-性化)させてやることであって、セックスはそこでは「普通に」異性と交接できるかどうかという機能的な観点からのみ、問題にされる<sup>15</sup>。また、過度に性愛に耽溺することは、リビドーの過剰な使用であり、特に確実な見返りが期待できない相手とのつきあいは、不経済であるがゆえに薦められない、云々。

かくして、アドルノに言わせれば、英語圏の大衆のセックスは見せかけの満足をもたらすに過ぎない、ということになるが、この何事にも程度を弁えた自己管理と健康志向に対する批判は、逸脱したブルジョワという自己認識を持った知識人が行いそうな物言いでは、ある。けれども、そもそもM・ハイデガーによる本来性/非本来性の区分けを擬似自然主義だと執拗に非難し続けた彼自身が、ことセックスに関しては「見せかけの満足」「偽りの享楽」「本物の幸福」などを臆面もなく口にし(Vgl., GS4, S. 69-70.)、性愛について規範的に語ろうとするのはなぜなのか。それは、しょせんサドやボードレールかぶれの文学趣味に過ぎないのだろうか。

確かにフェミニズムが教える通り、我々の考えるセックスの「普通」「自然」「本来」なるものは、歴史的に形成された文化バイアスを多分に含んでいる。そしてアドルノ自身、これを十分すぎるほど知悉している。彼がM・ホルクハイマーと共に最も敵視するバイアスは、「理念においては終わりのなき包摂の基体であり、現実においては終わりのなき服従の基体である」(GS3, S. 132.)<sup>16</sup> 自然として現れる女性イメージである。女性はそこでは、母性的な抱擁の主体であろうと、徹底して加工し調教すべき客体(=「おんな」)であろうと、いずれにせよある種の制限の無さによって特徴づけられるが、この表象自体が理性の含意する、支配原理としての道具的思考の正確極まりない対応物であるから、厳密にはここには想像力の働く余地はない、というべきだろう。アドルノの指摘によれば、支配すべき自然というイメージは、イメージですらない。特に性愛の場合はそうである。というのは、客体とのあまりに性急な直接的接触と同一化が繰り返される場合、憂慮すべきなのは、そうした直接性が——自然的本能といったものではなく——相手を「おんな」というカテゴリーに落とし込み、まさしく記号の対象として脱・固有化(=一般化)する、道具的理性の合目的性に裏打ちされたものではないか、ということなのである。「欲望の対象に直進するセックスは、あらゆる女性を攻撃目標と化し、それによって均一化する。」(GS4, S. 100.) アドルノは理性の抽象性を、肉体の反対物ではなく、肉体の持つ暴力性と癒着せざるを得ないもの、と捉えている。記号化した対象のイメージ——イメージというより、記号の再生装置と化した理性自身の写し絵、ホルクハイマーとの共著『啓蒙の弁証法』で彼が用いた規定で言うなら、「死せる存在の模倣」(GS3, S. 75.) というべきか——を男達が性生活の機軸に置いて、これを自明視すればするほど、セックスはその都度直接的に充足すべき生理的行為に還元される。或いは少なくとも、相手を享楽の単なる一方的な充足目標でない仕方では別様に想像するための、反省的余地が省略される。

従って、女性を純然たる自然と捉える短絡的見方には、歴史的バイアス以上のもの、すなわち制限なき支配という理性の、それ自身自然に由来する(!)暴力が存する、といえる。歴史のはじめから、性的なものは社会的なものであったというわけだ。父権主義と異性愛主義はその典型例だといえるが、そこに性愛を社会的成員の再生産という観点から価値評価する唯物論的見方も加えてもよい。これらをH・マルクーゼはフロイトにならって性器的体制と呼んだが、彼は早くも1930年代後半に、フロイトが性的成長の一局面として捉えたこの体制を快楽の制度化という政治的文脈に拡大解釈する試みを展開していた。優生——ドイツ風にいえば、民族衛生——思想に基づいたナチスの文化政策がそのターゲットだといえるが、アメリカ文化に対するアドルノの批判も、こうした政治的背景を考慮に入れねば、とうてい納得いくものではないだろう。

#### 4、同一なるものの再生産という享楽

前節で示したように、いつの時代でも、人間の行うセックスが、実際にただの生理的なプロセスに終始したことなどない。性行為にア・プリオリに内在する、とされる規範が眉唾物であることは確かだが、性についての語りには、常に規範的な身振りが付きまとった。とりわけ近代において、権力者たちがこの身振りに注目し、性規範の——学問や公共政策といった——制度への練り上げを促進し、管理と統制のツールへと洗練させていったという事実は、決して過

小評価できない。優生政策の近現代史が示すように、兵役を含む労働一般に十分奉仕しうる身体を備え、かつ、次世代の労働者を生み育てるに足る「正常な」生殖能力を持った国民を、近代の国民国家はまさに自身を形成する身体として表象した。ここから、フーコーの言う生権力、つまり国民の身体管理に過剰なまでに情熱を傾ける権力の姿が見えてくる。マルクーゼはもっと直截に「戦争国家とは福祉国家である」と述べている<sup>17</sup>。

ファシズム期において、こうした生権力が徹底して遂行されたことは、いまさら多言を要しない。ニュルンベルク法、断種政策、T4作戦、悪名高きレーベンスボルン（生命の泉）計画、それにナチスの党機関紙による反ユダヤ主義キャンペーンなどはその典型例であろう。ナチスは「血と大地」の匂いのしないユダヤ人を自然に反する存在と批判しながら、返す刀で、カトリックの信奉する家族愛をも嘲笑しているが、それは彼らにとって、生殖（＝再生産）は、必ずしも婚姻で結ばれた男女の自由裁量に委ねられるものではなく、国家が管理するものだったからである。未来の兵士、労働者である子供は、ドイツ人の共有財産というわけだ。この時期のマルクーゼも、明らかにナチズムを意識しつつ、ある種の「管理された快楽」へと囲い込まれる性行為について触れている。「性的関係を享受することが人間にふさわしいものとして承認されるのは、ただそれが新たな労働力の生産という明白な目的のもと、自然に対する社会的な支配プロセスに資する場合のみである。……子供の生産といっても、生産それ自体というより、有能で役に立つ子供を産むことが決定的なのであるが。」<sup>18</sup>

とはいえ、マルクーゼ、そしておそらくアドルノにとっても、ナチスの優生政策や文化戦略は、近代における快楽享受の形態の変化という、より広い文脈で語られるべき症例の一つであった。1937年のマルクーゼの論考「快楽主義の批判」は、ナチスの個々の政策や戦略の是非というより、近代の社会構造そのものに焦点を当てている。曰く、社会の急速な産業化を背景に、製品の大量生産といった規格化された労働が活動の大半を占めるようになると、人間の幸福もまた、そうした製品がもたらす物質的な満足に規定されてくる。さらにいうなら、製品を享受する消費者の受容の在り方、要するに彼（女）が満足するための感覚的条件そのものが、型通りで集团的なものへと規格化されてくる。ここでは、個人的であるはずの快楽の経験が、映画鑑賞やスポーツといった娯楽の形態に合わせて形作られる。果ては、政権の敵対勢力に対する残酷なテロが、観衆と化した人民の好奇心や、抑圧された社会的不満を密かに満足させる。これらはすべて、組織化された労働に対する反動として理解できるが、そもそも個々人の余暇は、労働への全面的な促しという現実の中では、労働と対立するというより、その延長に位置づけられる。人々をさらなる労働へと駆り立てることのできるものが、最上のレジャーなのである。「仕事の目的は幸福ではないし、仕事の対価は享楽ではない。そうではなく、労働のさらなる可能性をもたらす利益あるいは賃金である。」<sup>19</sup>ファシズム期において、性的快楽が奨励されるのは、それが役に立つからである。かくして、エロスの満足は己の生殖能力、その再生産能力の確認という一点を目指して遂行されるべきものとなる。

労働の全面化、というより、生産機構への人間の全面的な組み込みにより、個々人の欲望も社会化される。上述したように、マルクーゼは映画やスポーツを挙げているが、さらに彼がテロに触れているのは、おそらく彼が、抑圧された性衝動は、暴力や戦争を媒介として満足させられる、と考えているからだろう。そして英雄崇拜、自己犠牲の精神などによって満たされるそうした衝動や欲求は「人を不自由で盲目、貧しい存在にする。」<sup>20</sup>

マルクーゼの主張は、テクノロジーによる人間生活の徹底した疎外、というマルクス主義的図式に落とし込むことができるが、もともとフランクフルト学派のメンバーの多くが西洋マルクス主義から出発していたことに加え、大衆文化への根強い懐疑を持っていたアドルノがこうした図式を拒否する理由は特段、見当たらなかったに違いない。実際、例えば彼が主導して書いたとされる『啓蒙の弁証法』の第4章「文化産業——大衆欺瞞としての啓蒙」は、享楽の規格化というマルクーゼの洞察の、やや冗漫に過ぎるパラフレーズとして読解できるだろう。

アドルノはこの文化産業論の中で述べる。「文化産業は、自分たちの欺瞞が消費者の欲求を充たすものであるかのように吹き込むばかりではない。それ以上に文化産業の意味するところは、消費者が、何であれ、与えられたもので満足しなければならない、ということにある。」(GS3, S. 164.) 与えられる娯楽、それは消費者を、さらなる消費へと反復的に駆り立てる類のものでなければならず、従って娯楽内容は、再生産の担い手としての労働者の自己イメージ、或いは再生産という運動そのものを反映したものになる。その代表例はラジオで繰り返し流される寸劇やヒットソング、そして何より彼にとって「リズムをはずすことを馬鹿にしながら同時にそれを規範に高めるジャズのシンコペーションの原理」(GS3, S. 176.) である。ポピュラー文化の陽気さは、苦しみを意識することなく仕事に励め、という社会的圧力の陰画であり、大衆向けの映画がどんなにセックスを取り上げようとも、単なる享楽がそこで賛美されることはない。肉体の露出は、露出内容そのものがパターン化されることによって、エロスにとって最も重要な想像力を追放する。想像行為が規格化される、と言い換えてもよいだろう。アドルノはこれを性の中性化、或いは去勢化、と呼ぶ。

無論、去勢化といっても、エロスがメディア的消費物へと還元されることで、性暴力のない穏やかな社会が到来する、というわけではない。一見穏やかなその社会は、のちのマルクーゼの言葉でいうなら「抑圧的な寛容」という特徴を持つ。何を消費するかは大衆の自由、という寛容さの背後にあるのは、文化産業によって組織化された検閲コードの存在である。例えば肉体の賛美、男らしさの強調はナチスの専売特許ではなく、ハリウッド映画の主要コードでもあったことが想起される。アドルノもまた、戦後の論考「性的タブーと今日の法」で次のように述べている。「かつて神聖な結婚によって社会は性と折り合っていたが、今日では教会のような中間的審級はもとより、しばしば国家の認可さえ省略して、社会は性を直接管理する。」(GS10.2, S. 534-5.) 文化資本を独占する企業によって媒介され、広められる性規範がこの管理の実質的な主体ということになるが、こうした規範にまさしく社会の成員が集団的に身を委ねることで、規範が権威化される。とりわけ戦争期においては、精神よりも肉体への、知性よりも感情への、個人的自由よりも自己犠牲への、そして自己反省よりも他者＝敵の排除への訴えが政治的に喧伝されてくるが<sup>21</sup>、同質のもの同士の一体化を駆り立てるそうした訴えに、リビドーが利用される。マイノリティの迫害などに容易に結びつくそうした一体化は、アドルノの用語で言うなら、悪しきミメシス（自己の似せ絵）に他ならない。というのは、迫害対象へと押し上げられるマイノリティは、それぞれの社会的成員の内側にひそむ、制度化されざる性衝動が外部に投影されたものに他ならず、従ってアドルノに言わせれば、ユダヤ人や知識人、売春婦、同性愛者たちは、管理しきれない性という、文明人自身の古傷を一手に引き受けるべく仕立てられた、まさしくスケープゴートだからである。

## 5、覗き見について——ポルノグラフィーの政治と芸術

フロイトの説明では、リビドーはどこか過剰なものを含んでいる。だからこそ性愛関係は、他者への過剰（≡異常）な接近、およびその反動としての遠ざかりという、揺れ動きの経験を課さずにはいられない。エディプス・コンプレクスはその典型例だろう。だがリビドーの浪費を禁じ、ほどほどの付き合いを社会衛生上の理想に掲げる世界では、誰もが自己を大事にする。しかし、そもそも過剰であるリビドーはそうしたナルシスの状況への安心をもたらしな<sup>22</sup>い。エロスとして放電されない性衝動の攻撃性は、制度化された性規範と結託し、特定の他者に向けられる。社会全体の存立を脅かす不安要素へと引き上げられたマイノリティは否応なく攻撃対象となるが、彼（女）らへの攻撃は、社会的抑圧に対する反動がゆえに、これまた過剰なまでに残酷になる。「一見卑猥と見えるものが少なくなればなるほど、にもかかわらず依然として卑猥であるものに対し、一層手厳しく復讐せよ、ということになる。」（GS10.2, S. 539.）

アドルノは「性的タブーと今日の法」において、この論考が発表された60年代初めとファシズム期とに共通する精神的雰囲気<sup>22</sup>を指摘する。その主張の背景を知るには、D・ヘルツォークの『セックスとナチズムの記憶』が参考になるだろう<sup>22</sup>。アデナウアー率いるドイツキリスト教民主同盟（CDU）が政権を担ったこの時代は「復古」「反動」といったレッテルで特徴づけられることが多いが、特に性愛に関する保守主義が勢力を盛り返した時代でもあった。これは確かに、敗戦とともに混乱に陥った性規範に対するバックラッシュ（揺り戻し）として理解しうる。保守主義者は家族愛を顧みなかったナチスの性愛観を批判し、セクシャリティの矯正を訴えたが、ヘルツォークの指摘によれば、こうした「正常化への執念」は、ナチス自体が性愛における正常/異常の線引きを反ユダヤ主義や人口政策に利用していた事実を奇妙にも否認していた。60年代の場合、民族の崇高さではなく結婚の——つまり生殖を目的とした異性愛の——神聖さにそぐわないあらゆるファクターがターゲットになった。ポルノ雑誌、避妊用具、性的倒錯、買売春はいうまでもなく、ベッティングやマスターベーション、果ては（1951年に成立した「公共の場における青少年を保護するための法」にうかがえるように）家庭の場以外での「いちやつき」、等々。無論、この規制は暴力や身体的威嚇を伴うものというより、言論やキャンペーンといった形で展開されるものだったが、それが故に正常化の圧力は、性愛ということでは何を表象することが許されるか、という想像行為の規範化に直接関わるものだった、といえるだろう。

さて、マルクーゼは彼の名を一躍世界に知らしめることになった『エロスと文明』（1955年）の中で、こうした過剰な異性愛主義をフロイトの言葉を借用し性器的体制と定義していた。そしてアドルノもまた上述の論考の中で、異性愛の制度的圧力をフロイトの概念を用いて論じている。「性器性が社会的に確固としたものとして立証されるに従い、部分欲動、そして性器的関わりにおける部分欲動の代表に対する圧力が増大する。その名残として社会化された覗き見（Voyeurismus）のみが、すなわち予備的欲望のみが洗練される。それは女性との合一の代わりにすべてを観察でもって置き換え、性の社会化の傾向を表現することになるが、この傾向そのものが、性の致命的な統合の局面を決定づけている。」（GS10.2, S. 538.）

部分欲動とは、これまたフロイトの用語である。ここでは例えばフロイトが性欲論で挙げた、

(若年期における)唇や肌の接触に由来する快樂のみならず、肛門や陰核への愛好的態度から、大人同士のペッティング、同性愛、そしてポルノ雑誌による「代理的」満足など、様々な欲望の形態が念頭に置かれていると考えられる。しかしこれらは、男女の性器同士の肉体的交接という「純粋な」セックス重視の社会的風潮のもとでは、不純で倒錯した快樂、とみなされる。とはいえ、決して払拭しきれないそうした快樂への誘引は、社会化された覗き見の洗練を促し、それによって性の致命的な統合がなされる——これはどういうことなのか。

異性愛主義は覗き見とどう関係するのか。一つのヒントを、ヘルツォークが与えてくれる。彼によればファシズムの時代、ナチスのプロパガンダを担った『黒色集団』『突撃者』『女性視点』といった雑誌には、アーリア人種の自然で素朴な美しさを称える田舎女性の写真と並んで、ワイマール期のキャバレー文化を彷彿とさせる半裸の女優の姿や、ドイツ女性がユダヤ人企業家の慰み物になるシーンなどが頻繁に掲載されたという。無論、ファシズム体制は前者を奨励し、後者を否認する。が、この正常/異常の構図が、一つのページに並置されたという点にポイントがあって、それにより体制は「自らを上品な趣味と純粋な道德の守護者として提示すると同時に、のぞき見の喜びを刺激し扇動すること」<sup>23</sup>が出来たという。

雑誌を見るものを捕えたのは、無論、異常な構図の方であろう。ヘルツォークは反ユダヤ主義キャンペーンや退廃芸術批判といった文化政策がポルノとして受容された可能性を示唆している。それは、性的欲望はそもそも反道德的なものに惹きつけられる、という身も蓋もない事実を物語るだけではない。より重大なのは、それらが持つ多様なリビドーの共感の可能性がポルノグラフィーのような形へと可視化され、さらに、型通りの都市女性像やユダヤ人イメージへと固定化されることで、いわば公然たる覗き見が成立したことではないだろうか。猥褻なもの、の想像が禁止される、というより、公認され、管理された猥褻物として、不純な性的行為が可視化される。が、それらはまさに公認済みの表象へと囲い込まれるわけだから、異性愛主義の正確な陰画、ということになる。

そうになると、覗き見、もしくはポルノに対するアドルノの態度は、思った以上に複雑であることが明らかになる。「性的タブーと今日の法」で彼はポルノ雑誌の規制に反対の態度を表明しているが、それは規制が、若者の覗き見の可能性を完全に締め出す——つまり、町の裏通りから不純なものが一掃され、全ては規範化された物分りのよい家族愛というプライベート空間に封じこまれる——からだ、と推測される。けれども、他方で彼は性愛の大衆化・商品化という現実を前に、覗き見される当の性的表象それ自体が画一化される傾向を感じていたはずである。そこにはもはや、見えないもの、見てはいけないものを垣間見るといふ、覗き行為の持つある種の暗がりはない<sup>24</sup>。しかし問題は、例の身体的盲目性(＝直接性)を回避するアドルノが、想像行為と結びついた覗き見をむしろ、性愛の持つ真理開示の可能性の数少ない契機と捉えていた点にある。確かに「女性との合一の代わりにすべてを観察でもって置き換え」る覗き見は、パターン化したポルノグラフィーに注がれる、肥大化し制度化した性的まなごしの厄介さを物語る。が、他方で彼はこのまなごしに、本来性のお墨付きを与えようとさえしていた。1956年に書かれた短い論考「シュルレアリズムをふりかえる」の中でアドルノは、まさにブルジョワ的室内から解放された芸術家の視線が都市という「外部」をさまよい、その暗部を覗き見つつ写真に収めた時代を回顧している。長めに引用しよう。

「シュルレアリズムのモデルはポルノグラフィーであろう。コラージュにおいて生じていること、そこで口もとに張りつめられた快楽の表情のように痙攣しながら動きを止めるもの、それは窺視者（Voyeur）が性的満足を感じる瞬間にポルノグラフィーの表情が蒙る変容に似ている。コラージュにおける切り抜かれたバストやマネキンの絹のストッキングをはいた脚——これらは、かつてリビドーが目覚める手がかりとしていた、例の部分性欲の対象となる事物を記憶するための目印なのだ。忘れられていたものが、生命をもたぬ事物のように、こうしたもののかたちをとって姿を現わす。愛が本来欲していたもの、愛がみずからをそれに似せようとするもの、われわれがそれに似ているものとして、その姿を現わすのだ。ポルノグラフィーと血縁関係にあるのが硬直した覚醒としてのシュルレアリズムである。シュルレアリズムが捕獲するものはなるほど《イマーゴ》には違いないが、それらは……歴史的イマーゴなのであり、そうしたもののかたちをとって、自我のもっとも内奥の部分がみずからを自我の外部、社会的・歴史的なものの模倣として自覚するのである。」（GS11, S. 104-5.）

この引用部の解釈には、今はあまり手をつけなくておく。とはいえ、シュルレアリズムという「ハイ・カルチャー」を回顧するアドルノの態度がどれほどブルジョワ的なものであらうと<sup>25</sup>、彼の主張は、先述の公然たる覗き見——それはまさしく異性愛主義および男根主義の排他的構造、つまりアドルノ言うところの「同一性の原理」を物語っていたが——とは区別すべきだろう。

というのは、アドルノの言う覗き見は、まなざしを通した対象の我有化という一方的な志向では説明しきれないものを含んでいるからである。S・W・ニコルセンの指摘を援用しつつ<sup>26</sup>、この問題について最後に少し述べておこう。彼女は写真という芸術媒体を巡るアドルノとベンヤミンのポジションの相違を論じている。ここでは最低限の祖述にとどめたいが、要するにベンヤミンは被写体の立場と自己を重ね合わせるのに対し、アドルノは撮影する側の視点を堅持する傾向にある、と彼女は言いたいのである。自分を見る対象に近づき、対象の中に自らを溶け込ませ、対象そのものになること、そこにベンヤミンの欲望があるとすれば、アドルノの欲望は、対象と距離を取りつつ、それを視野に収めようとする意図に表れる。しかもそれは、対象を「そのまま」映し出すリアリズムを志向するのではない。レンズを覗く者が期せずして目撃するのは、まるで撮影者自身の欲望を即座に見抜きでもしたかのような対象からの呼びかけであって、その呼応が対象を、夢うつつの中で見たかの如き歪みと断片性でもって浮かび上がらせる。万人向けのモニュメンタルな全体像というより、まなざしのフェティッシュな執着が色濃く残る部分的イメージのコラージュやモンタージュが現れる。従って、シュルレアリズム芸術の持つショックの契機は、見る者の無意識的欲望を瞬時に引き出し、それをかすめ取る点にある。いわば窺視者自身が窺視する対象を通して、自己自身を窺視するまなざしに捕われる、そうした倒錯的经验こそがポルノグラフィーの真骨頂だというわけだ<sup>27</sup>。

ご覧の通り、整理するのが厄介な錯綜した美的感覚であるが、どうもアドルノは、シュルレアリストがパリを遊歩しつつ撮影したポルノグラフィックな写真を、性的欲望のドライブ装置というより、むしろ、ポルノに期待する男性達の即物的な意図を宙吊りにするような、ある種の硬直、結晶化（kristallisieren）——これは彼が最も好んだ美学用語の一つだ——の媒体と

捉えていたのではないか。だとすれば、ニコルセンはそこまで述べていないが、上述の引用部でアドルノが触れた女性のまなざし、すなわち窃視者の欲望が成就せんとするまさにその瞬間に凝固するポルノグラフィーの表情とは、見た者をショックで石に変えるという、かの女神メドゥーサのまなざしそのものではないだろうか<sup>28</sup>（続く）。

注記：本稿は科学研究費補助金（課題名「フェミニズムの問題圏から見た批判理論の可能性」）による助成を受けたものである。

- 1 本文中、アドルノ全集から引用する場合、Rolf Tiedemann u.a. (Hg.), Theodor W. Adorno, *Gesammelte Schriften*, Suhrkamp, Frankfurt a.M., 2003 を用い、GS と巻数、頁数で簡略表示した。
- 2 シュテファン・ミュラー＝ドーム、『アドルノ伝』、徳永恂監訳、作品社、2007年、605頁。
- 3 Ina Hartwig, Arlette und ihr Adorno — Die Geliebte und der Philosoph. Eine alte Geschichte, neu erzählt, in: <http://www.zeit.de/2012/41/Philosoph-Adorno-und-Geliebte-Arlette>
- 4 『否定弁証法』の末尾でアドルノは「しかし、思考はそれ自体ひとつの行為である以上、なんらかの欲求を宿しているのだ——まずは、生きてゆく必要性を宿しているのだ。」(GS6, S. 399.) と書いているが、ここで言われる欲求 (Bedürfnis) とは、生命維持のための単なる生理的働きのことではない。欲求は彼の場合、しばしば性衝動、すなわちリビドーの働きと重ね合わされる。衝動と思惟との関係に関してはアドルノの『ミニマ・モラリア』を取り上げないわけにはいかないが（例えば断片 79 など）、立ち入った論述は別稿で行いたい。
- 5 周知のようにアドルノとM・ホルクハイマーは共著『啓蒙の弁証法』において、セイレーンとオデュッセウスにまつわるエピソードを、合理主義に代表される西洋知の運命を物語る寓話として解釈した。本稿ではこれに深く立ち入ることは差し控えるが、一点だけ、事柄の先取りとして記しておく。『啓蒙の弁証法』は主として、基軸となる論考「啓蒙の概念」とそれに続く4つの断章から構成されているが、この4つ全てにわたり、女性のモチーフが論述の伏流として見いだせるのは偶然だろうか。すなわち「オデュッセウスあるいは神話と啓蒙」では女神セイレーンのみならず、オデュッセウスを籠絡した女神キルケー、彼の妻ペーネロペーアと、彼を裏切った罪で皆殺しにされる下女達が、「ジュリエットあるいは啓蒙と道徳」ではサドの描く、享楽に憑かれた令嬢達が、「文化産業」ではあくせく働く夫を尻目に、メディアや大衆文化が提示する美的基準を率先して受け入れ、消費する夫人達が、「反ユダヤ主義の諸要素」では、ファシズムの盲目的崇拜者にして犠牲者たるドイツの女達が。これも本稿では詳述できないが、女性について社会哲学的に分析する計画を、アドルノは比較的早くから懐胎していたように思われる。最も重要なドキュメントの一つは、彼が1937年11月16日に亡命先のロンドンからE・フロムに送った手紙だろう (*Theodor W. Adorno Max Horkheimer Briefwechsel 1927-1969 Bd. I: 1927-1937*, Christoph Gödde und Henri Lonitz (Hg.), in: *Theodor W. Adorno Briefe und Briefwechsel, Bd. 4*, Theodor W. Adorno Archiv (Hg.), Suhrkamp, Frankfurt a.M., 2003, S. 539-545.)。フロムに共同プロジェクトを持ちかけるその手紙では、女性の商品性格や物神性格、物象化の帰結としての女性の冷感症などが言及されているが、アドルノが戦後発表した『ミニマ・モラリア』にはこれらのモチーフが、特段の変更点を加えることなくそのまま持ち込まれることになる。
- 6 ミュラー＝ドーム、前掲書、606頁。もしくは GS20. I, S. 406-7.
- 7 Vgl., GS3, S. 287-8. もとは嫉妬する者を意味するメガイラは、復讐の三女神エリーニュエスの一人。
- 8 詳細は前述の Hartwig の記事の他に、以下の論考を参照。Heinrich Adorf, "Adornos verkaufte Braut-Rekonstruktion einer Beziehung", in: Stefan Müller-Doohm (Hg.), *Adorno-Portraits. Erinnerungen von Zeitgenossen*, Suhrkamp, Frankfurt a.M., 2007.
- 9 Theodor W. Adorno/Lotte Tobisch, *Der private Briefwechsel*, Bernhard Kraller und Heinz Steinert (Hg.), Literaturverlag Droschl, Graz, 2003, S. 268.

- 10 内面性批判というモチーフはアドルノの全作品の通奏低音を成している。以下の拙著がその一端を紹介・考察しているので参照。入谷秀一、『かたちある生 アドルノと批判理論のビオ・グラフィー』、大阪大学出版会、2013年、第4章「知識人の住まう風景——アドルノとサイド」、125-164頁。
- 11 著作や論考を物するとき、アドルノはしばしば、妻グレーテルに口述筆記をさせる、というスタイルをとった。のみならず、多くの手紙に、彼は妻と自分の名前を連名で載せた。比喩的にいえば、彼の「声」は妻のそれと同化しており、こうしたメチエを採用することで、彼は語りの次元に絶えず他者を招き入れた——こう述べると、何やら連れ合いとの、エロスのニュアンスを含んだ信頼関係を言い表しているようで、ほほえましくもあるが、この関係は時に妻を、自己の性愛の顛末の目撃者となるように強いた。例えば『夢調書』という遺稿がある。しばしばアドルノは起床後に自分の見た夢を書きつけ、これを後に妻グレーテルに清書させていたが、1969年4月12日付けの夢には、アルレッテ・ピールマンを思わせる人物がAというイニシャルで登場する（彼女との関係の破綻をトービッシュに報告する約一週間前のことである）。ここでアドルノは、高い塔から身投げするなどして「Aと心中する計画」について話し合ったことを記している（Theodor W. Adorno, *Traumprotokolle*, Christoph Gösde und Heinri Lonitz (Hg.), Suhrkamp, Frankfurt a.M., 2005, S. 87.）。グレーテルがどのような心境でこの調書を読み、遺稿として残したのか、伺える記録は残っていない。
- 12 キルケゴール、『誘惑者の日記』、浅井真男訳、白水社、1975年、150-2頁、アドルノ、『キルケゴール 美的なものの構築』、山本泰生訳、みすず書房、1998年、81-2頁、ベンヤミン、『パサージュ論』第2巻、今村仁司・三島憲一ほか訳、岩波書店、2003年、49-50頁。訳文はベンヤミンのものに従った。
- 13 アドルノのシューベルト論については、入谷、前掲書、132-6頁も参照。一つ指摘しておく、と、彼が論考「シューベルト」（1928年）のはじめに置く火山の噴火口の描写は——論考の冒頭にルイ・アラゴンの詩を引用している点からも伺えるように——シュルレアリズムの形式を踏まえたもの、と言えようが、ここには、あまりに世俗化し過ぎたシューベルト・イメージを解体せんとする意志が読みとれる。本稿末でわずかに触れるしか出来なかったが、彼のエロス論は1920年代におけるシュルレアリズム経験に多大な影響を受けているのでは、と著者は考えている。
- 14 ヴァルター・ベンヤミン、『ベンヤミン・コレクション① 近代の意味』、浅井健二郎編訳・久保哲司訳、筑摩書房、1995年、565頁。
- 15 カレン・ホーネイは修正フロイト主義者（新フロイト派、という言い方もある）の立場を「精神分析の社会学化」と捉えて批判するアドルノの主張は、『ミニマ・モラリア』以外では論考「修正された精神分析」（1952年）、「社会学と心理学との関係」（1955年）などで展開されている。アドルノの主張、というより、ある種の苛立ちがどこにあるのか、それを一言でいうなら、非連続性の無視、とでも形容できようか。つまり、修正フロイト主義者の考えるように、社会に対する個人の適応という基準を重視するなら、社会的規範を個人が漸次的に、自己の「性格」として内面化しつつ取り入れる、という発達心理学的プロセスが強調されてくる。この場合、外的規範（＝社会）の取り込みと内的性格（＝個人）の発展的形成とがパラレルに捉えられるが、アドルノによれば、この相応性が過度に評価され、人の成長とはすなわち個人の社会化の度合いにのみ存する、と素朴に想定されればそれだけ、社会と個人との釣り合いの無さに敏感に反応する身体的感覚は無視されてしまう。彼はむしろ、社会の威嚇的圧力は、完全に内面化されざる外的存在——それこそ心的外傷という形で——として、個人を無意識のうちに翻弄している、と考える。そこから、首尾よく外的条件に適応した性格なるものの土台は脆弱なるものだ、という洞察が導かれる。「苦しんだ挙句に常に不完全にしか癒着しない痕跡のシステムが性格である、といってもよいくらいなのだ。こうした傷あとこそは社会が個人の内部を貫通している証拠なのであり、修正主義者たちは連続性に未練があるために個々の衝撃的な構造に目をつぶっているのだが、そうした連続性など幻影でしかないのである。」（GS8, S. 24.）以上のアドルノの主張は、本稿のテーマを考える上でも重要な示唆を含んでいる。というのは、まさにシュルレアリズムよろしくショック、非連続的な衝撃を強調する立場こそ、彼にとって「真の」エロスの経験が切り開かれる地平に他ならないからである。
- 16 この規定は、生産を司る母と快楽に身を亡ぼす女という、ナチスのプロパガンダにも使われた分裂的女性

- 観と関連するものではないだろうか。そしてまた、崇高と卑猥という両極に配置されるバダイユ好みの女性イメージは、それ自体が男性的想像力の限界——男性自身が幻想として欲望し想像するような境界線——の反照として解釈できないだろうか。
- 17 いうまでもなくこれこそ、マルクーゼが1964年に発表した『一次元的人間 先進産業社会におけるイデオロギーの研究』（生松敬三・三沢謙一訳、河出書房新社、1980年）を貫く通奏低音である。
  - 18 Herbert Marcuse, “Zur Kritik des Hedonismus”, in: *Herbert Marcuse Schriften, Bd. 3*, Suhrkamp, Frankfurt a.M., 1979, S. 274.
  - 19 Ibid., S. 275.
  - 20 Ibid., S. 277.
  - 21 アメリカ亡命中にアドルノが英語で書いた論考「反ユダヤ主義とファシストの宣伝活動」（1946年）「フロイト理論とファシストの宣伝活動のパターン」（1951年）がこの問題を扱っている。
  - 22 ダグマー・ヘルツォーク、『セックスとナチズムの記憶——20世紀ドイツにおける性の政治化』、川越修・田野大輔・荻野美穂訳、岩波書店、2012年。
  - 23 ヘルツォーク、前掲書、31頁。
  - 24 越智和弘は大澤真幸らの議論を援用しつつ、写真に向けられた男性的視線の持つ窺視的特徴を、被写体となる対象を「可視性と不可視性との境界に保持する」点に見ている。越智、『女性を消去する文化』、鳥影社、2005年、349頁。
  - 25 スーザン・ソントグはブルジョワ的出自を持つ写真家の欲望を次のように要約している。「現実とはカメラをもった勤勉なハンターが追跡し、捕獲するエキゾチックな獲物である、とする見方は最初から写真術を満たしており、シュルレアリズムの反文化と中流階級の社会的冒険主義の合流点を標している。写真術はいつでも社会の高みとどん底に魅惑されてきた。……社会の悲惨は安楽に暮らしているものたちに、写真を撮るというもっとも穏やかな形の略奪をおこなって、隠された現実、つまり彼らから隠された現実の記録を取りたいという衝動を吹き込んできた。……写真家は都会の煉獄を踏査、闊歩、巡回する孤独な散歩者、都会を官能の極まった風景として発見する覗き見趣味の逍遙者の、武装した形態である。」（ソントグ、『写真論』、近藤耕人訳、晶文社、1979年、61-2頁）。ソントグに言わせれば、シュルレアリズムとは——ハイデガー的物言いをを用いるなら——ブルジョワの「克服」ではなくその「完成」ということになるのだろうか。彼女の乾いた石のような文体は、写真家たちの墓碑を刻み、一切の感傷なしに彼らを葬送しているかのように見える（「石」、或いは石化については、本稿末尾と注28を参照）。
  - 26 Cf., Shierry Weber Nicholsen, *Exact Imagination, Late Work: On Adorno's Aesthetics*, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts/London, England, 1999, 特に Chapter 1 “Adorno and Benjamin, Photography and the Aura” (p. 181-225).
  - 27 見るもののまなざしを誇張しつつ見返すことで、見るもの自身を驚愕させ、反省へと促す、こうしたモチーフはアドルノの有名な「精神分析においてはその誇張された面だけが真実である」（GS4, S. 54.）というテーゼ以外にも、彼の作品全般に渡って散見される。スクリーンショットのモンタージュ的組み合わせのように、切り詰めた構文が連なる彼のエッセイ、アフォリズム自体がその具体的現れだといえよう。カメラのレンズを思わせる、もっとあからさまなテーゼもある。「きみの目のなかの塵こそはこの上ない拡大鏡の役目をしているのだ。」（Ibid, S. 55.）
  - 28 アドルノ自身はここで、シュルレアリズムのイメージに似た存在として、子を失ったニオペーに触れている（Vgl., GS11, S. 104.）。ニオペーはギリシア神話に登場する女性で、ゼウスの血を引く男児7人女児7人の多子を自慢したため女神レートー（アポローンとアルテミスの母）の怒りを買ひ、アポローンとアルテミスに子を全員殺された。嘆き悲しむニオペーの涙はとまらず、ゼウスに願ひ自身を石に変えたという。